

明末の結社に関する一考察（上）

——とくに復社について——

小野 和子

【要約】 明末、東林党が弾圧によつて壊滅してのち、生貞層を中心に復社が設立された。復社は古学復興をスローガンに、八股文の評選機関として全国的な組織をもち、復古主義を当時の一の時代思潮たらしめるうえに大きい役割を果した。しかも復社はその全国組織を背景に内官派に対抗する大きい政治力をもち、崇禎末には、一時、妥協的な形であるが、東林派内閣を成立させて、その政治主張を実現させた。それは滿洲の侵入と農民起義の拡大に直面して、江南先進地帯における比較的開明的な地主層が、当面の危機を緩和するために内官派の腐敗した政治に抵抗しようとした政治運動であつた。明末清初の政治及び思想史のうえで復社のもつた意義は極めて大きい。

はじめに

天啓初年、三案をめぐるはげしい政治的論戦ののち、東林党は狂暴化した魏忠賢一派の弾圧に多くの指導者を失ひ、書院も閉鎖されて、一時完全な壊滅状態に陥入れられた。しかし東林の政治運動はこれによつて完全に敗北したのではなく、つぎの世代へあらたなちで継承されていつた。

これが復社の政治運動である。復社は「古学復興」をスローガンに八股文の評選機関として全国的に青年士大夫層を組織していた。明末清初のすぐれた思想家顧炎武・黄宗羲・王夫之・方以智らはいずれも大なり小なり復社に関係をもつていたのであつて、彼等の実学的精神がはぐくまれた環境として、復社の復古主義とその実践運動のもつた社会的雰囲気を見無視することは出来ない。そして復社の復古

主義がそれ自体としては極めて未成熟なものでありながらも、当時の一の時代思潮として、明代の所謂「講學的學問」から清代の「事實的學問」すなわち考証學への轉換過程においてもつた思想史上の意義にも無視し得ないものがあると思われる。

しかもそれはたんなる文學的結社にとどまつたのではなく、復社はその全国的な組織力を背景に、宦官派に対する大きな政治力をもち、一時妥協的なたちちにおいてではあるが東林派内閣を成立させ、部分的にその政治主張を實現させた。もちろんそれは支配体制そのものの根本的な變革を意圖するものではなかつたけれども、當時の深刻な危機感から出發して支配体制の部分的な改革を指向したものであつた。その運動は當時の江南先進地帯における經濟的發展を背景に、未熟ながらも中國の近代化へのひとつの途を指し示す運動であつたといえる。

復社はこのように思想的、政治的に重要な意義をもつ結社であつたにかかわらず、復社が清初において反清運動の底流となつたこと、復社の指導者のひとりであつた周鍾が、李自成に勸進表を奉つたことなどから、復社に関する史料

も清代においてはほとんど顧りみられることなく、清末國粹學報による人々によつてはじめて整理されはじめた^①。こうしたことから復社に関する研究もおくれ、謝國楨氏「明清之際黨社運動考」(一九三四)というすぐれた業績をのぞいて、ほとんど研究が行われていない^②。そこですでにのべたような事情からする史料の制約や、党争につねに伴う史料的な混乱をも予想したうえ、非常に不十分なたちちではあるが、ここに復社史をまとめ、明末政治史解明のひとつの素材としたいと思う。

① 現在復社の根本史料ともいふべき陸世儀「復社紀略」は鈔本として伝わつていたものが、清末國粹叢書の一冊としてはじめて刊行された。しかし、別本がなく、訂誤の方法もなかつたため、文字の誤りも多く、且つ崇禎十年ごろでおわつている。また國粹學報には復社に関する記事がかなり多い。

② この他復社に関する研究としては容肇祖氏「述復社」(『明代思想史』附録)、大久保英子氏「明末讀書人結社と鄉村活動」(『近世中國教育史研究』)があり、応社に関しては朱俊女士「明季南廬社考」(『國學季刊』2ノ3)、讀書社に関しては同女士杭「州讀書社考」(『國學季刊』2ノ2)の研究がある。

魏忠賢一派の反動攻勢が激化しつつあつた天啓四年六月（一六二四）、東林党の左副都御史楊漣は魏忠賢の二十四大罪を列挙し、言葉はげしく彼を弾劾した。しかしこれに対して天啓帝は何らかえりみることなかつたばかりか、逆に楊漣を懲戒処分（一）に附し、魏忠賢を慰留するといふ始末であつた。憤激した大学士葉向高ら東林系官僚は相次いで魏忠賢弾劾の挙に出たが、危機を感じた魏忠賢は逆に狂暴化し、翌七月工部侍郎万燝を杖殺したのをては、じめに、陰謀をめぐらせて大学士葉向高、吏部尚書趙南星、左都御史高攀龍らを免職、楊漣、僉都御史左光斗らを削籍し、東林党追放に成功して天下の大権を掌握するに至つた。

復社の前身である応社が設立されたのは、時あたかもこの年の冬、楊漣が會つて知県をやつたことのある江蘇常熟の地（二）においてであつた。この楊漣の魏忠賢弾劾が、どのように当時の人心にアピールするものであつたか、復社の同人吳応箕は

南京に楊漣の魏忠賢弾劾の上奏が伝えられるや、ほとんど家ごとに鈔し、戸ごとに誦するがとき有様で、忠義の氣が一時に鼓舞するのを覚えた。（『留都見聞録』甲子七月）

とそのときの模様を伝えているが、このような状況は楊漣の五年間にわたる善政の記憶も生々しい常熟（三）の地においてはもちろんのこと、東林との関係のふかかつた江南一帯地方にあつてもおそらく同様であつたろう。しかるにこの楊漣の上奏が葬りさらされたばかりか、逆に東林党がつぎつぎに追放されていくというニュースはおそらく当時の若い人々を激昂させたにちがいない。応社の復古のもつた実践的な性格からしても、現実の腐敗と混乱を何とか收拾しなければという彼等の気持が儒教的な発想から「學術の復興」というかたちで応社に結集していつたと思われる。

応社にはすでにのべたように、李自成に勸進表を奉つた周鍾が指導的な立場で参加していたが、こうしたこと（四）から応社に関する史実が湮滅された形跡があり、その設立の経過もそれほど明らかでないが、朱彝尊は「静志居詩話」卷二十一楊廷樞の条に

先生、応社を呉中に倡え、五經文字を評隲す。

といい、張溥も

志は昔年になりて、事は今日に大なり。維斗（楊廷樞）これをはじめ、十二人これを広む（『七錄齋集』卷三応社十三子序）

といつてゐる。しかし、朱彝尊は同じく楊彝の条に張采の言葉としてつぎのようにいう。

甲子(四年)冬、天如(張溥)とともに唐市を過り、子常(楊彝)の廬、麟士(顧夢麟)の館を訪う。遂に応社の約をなす。年を叙し、子常、長に居る(『醇志居詩話』卷二十一)

といい、さらに計東の

子常・麟士、社事を経営すること最も先なり。

という言葉葉を附録してゐる。張溥・張采が常熟に楊彝・顧夢麟をたづねていつたとき、すでに応社の原型となるべきものがこの年すでに常熟の地に設立されていたのであろうか。

楊彝は常熟の人。経済的に非常にゆたかで、文人たちとの交際を好んだ。太倉の顧夢麟は彼の許に久しく寄寓していた文人の一人であるが、彼はまた明の滅亡後同じ常熟の汲古閣毛氏に寄寓してゐる。彼の学問については

毛・鄭の学に長じ、つねに講道の名を欲せず。婦有光の言を称して、漢儒はそれを講經というに、近世これを講道という。能く聖人の經を明らかにして、斯道、明らかなり。道何ぞ講すべけんやという。(『復社姓氏録』)

というように、道そのものを講ずるのではなく、經を通じて道を明らかにしようとする立場で、とくに漢儒の伝註を高く評価していた。そしてこれに共鳴した楊彝とともに講學して、万曆以後の空疎な学問的傾向を打破し、世に楊・顧の学と称せられ、すでに多くの弟子を擁していたという。このような五經の復興ということは周鍾によつてもすでに天啓元・二年ごろから提唱されていたらしい。張溥はつぎのようにいう。

時文一たび流行するや、士人の志は、日ごとに荒下し、諸子の説、耳目に近からず。未だ天下にその書あるを知らず、書を作るにその人あるを知らず。況や五經の極深をや。周鍾は西成(天啓元・二年)の文においてその説を倡えてより、四方はじめて形を改め、慮を易え、古をいうをたのしむ。……之を要するに、古学、已に立つこと、子丑(四・五年)をへて百家競い興る(『七録齋集』卷二房稿表經序)

という。つまり天啓元・二年ごろ周鍾が八股文の流行が士大夫の心を腐敗せしめていることを反省して、經学の復興に志したが、それは応社が設立せられた天啓四・五年ごろにかなり支配的な風潮となつたといふのである。しかし、

張溥自身は最初からこのような復古主義者であつたのではなかつた。彼は当時この地に流行していた文社にもあまり関心を寄せず、張采を館賓として招いて、専ら、より新しい樊宗師、劉知幾の文章を学んでいた。そして当時卑俗に流れていたこの地方の文学を大いに振興しようと考えていたのである。しかるに歲試に失敗してはじめて金沙に周鍾をたづね、三人相会つて議論すること一晝夜、ついに訂盟して別れたが、このとき以後、彼は今までの学問を放棄し、専ら經の文章に学んで歲試にトップで合格したといわれる。おそらく周鍾の五經復興に大いに共鳴した二人が、楊彝・顧夢麟のもとをたづね、応社の約をなしたと思われる。⑤

応社は八股文の評選機関として設立せられたのであるが、彼等は決して八股文の評選に満足していたのではなかつた。彼等は当時科挙が八股文という形式的な文章を要求することによつて士大夫階級を完全に無思想化している事実を鋭く指摘している。

經学のいわれざるや、久し。……今の人の師にうけ、読むという所のものは、何者の書ぞや。且つ一經を習いて四經を捨て、遠図を忘れ、近意を守りて亦已むという。……その愛のはしまる所を

求むるに、聖賢の路、絶えて通ぜざるは、皆時文の道がこれをふさぐなり。……經文の効、世に顯われず則ち相与に苟めの利をなすのみ……。然れども前聖の学は後人に因つて譏りを召かず、君子の志は衆疑によつて抑せられず。六經の法は君臣父子の大行なり。……（『七録齋集』卷二易文觀通序）

すなわち、八股文が世を風靡し、人々は専らその受験勉強を事として、「君臣父子の不行」たるべき「六經の法」が失われてしまつた。それが政治と道德の頽廢を招いた最大の原因である。したがつて六經を復興することこそ、この現実を改革するためのまず第一の課題でなければならぬ。⑥

応社はそのために「經を尊び、古に復する」ことを標榜して設立せられたのである。

この数人（応社の同人）は一日として古人を忘れず、時文の盛興を慨ぎ、聖教のまさに絶えんとするを慮りて、各々習う所の經を取り、その大義を列し、前者の説を聚めて其の是を求め、以て俗に誦う。苟しくも或いは道里の遠くして質析に難ければこれを制義に仮りてその問難を通ず……。『七録齋集』卷二詩經応社序）

と張溥は書いている。かくして応社は、その同人十一人が詩（楊彝・顧夢麟）、書（楊廷樞・吳昌時・錢師）、春秋（周銓、

周鍾)、礼(張采、王啓榮)、易(張溥、朱隲)と夫々専門にしたがつて分担し、^⑤古人の学説をあつめて批判・検討しながら、正しく初学者を教え導こうとした。そして遠方で質疑応答の困難な場合には受験指導的な八股文の評選をも併せて利用したのである。

さてこの応社という名の由来については復社の場合ほど明らかではない。張溥は応社の発展である広応社に序して「応の名たる龍、徳あり。予嘗つて一たび其説を序せるも、恢愕恠宕、究詰すべからざるの辭多し。今に及んでこれを視るに益々雜にして挙げず。來之(呉昌時)彦林(錢旒)のこの挙あるや、古に応ず。故に龍、説を略して之に告ぐに声氣の正を以てす……」(『七録齋集』卷一広応社序)

といつてゐる。「応」というのは、彼が専門とした「易」の用語であることはうたがえない。すなわち易では、初と四、二と五、三と上の上下相對應する爻が一陰一陽なるときを「応」といつて尊び、就中二と五の相應するものを尊ぶ。たとえばその一、「同人」象伝には

同人は柔位を得て、乾に應ずるを、同人という。同人に曰く、同人野に于てす、亨る、大川を渉るに利ろしとは乾の行なり。文明

にして健、中正にして応ず、君子の正なり。唯君子のみよく天下の志を通ずることをなす。

という。また龍徳についてはやはり易の「乾」に九二に曰く……子曰く。龍徳ありて正しく中する者なり。庸言之れ信にし、庸行之れ謹み、邪を困^よぎてその誠を存し、世によくして伐らず、徳溥くして化す……

といわれている。おそらく、応社における経学復興を通じて、龍徳を具えた聖人君子が出現し、この現実の腐敗と混乱を收拾すること、そして万物がその法則にしたがつて正しく運行し得るような状態(それは彼においては古代に比定される)に復帰させることを念願してかく名づけられたのであろうかと思われる。

- ① 『道光蘇州府志』54職官志によれば楊澹は万曆三六年から万曆四〇年まで五年間在任した。
- ② 錢謙益・『牧齋集』五、都察院左副都御史贈右都御史加贈太子太保諡忠烈楊公墓誌銘
- ③ 查慎行『人海記』下
- ④ 朱俊女士前掲論文參照
- ⑤ 『同治蘇州府志』楊頤兩先生伝、同右所引
- ⑥ 『復社紀略』卷一
- ⑦ 『七録齋集』卷一五経徴文序

⑧ 同右

二

応社設立後の二・三年は反動の血なまぐさい嵐が吹きま
くつた時期であつた。天啓五年（一六二五）魏忠賢一派は移
宮問題に關係して東林党の楊漣・左光斗らを逮捕して虐殺
し、東林書院を閉鎖した。つづいて翌六年（一六二六）『三
朝要典』を編纂して東林党人を誹謗、さらに周起元、黃尊
素らを逮捕し、高攀龍が自殺したほか、いずれも詔獄に獄
死せしめたのである。こうした魏忠賢一派の弾圧によつて
東林党はその指導者をほとんど失うが、この時、東林党人
の逮捕に反対して、各地で開説の変と称せられる民変がお
こされた。とくにもつともはげしい抵抗がおこされたのは、
周順昌逮捕のために緹騎が蘇州におもむいたときであつた。
期せずして集つた一万余の民衆は激昂のあまり、実力で緹
騎におそいかかり、ついに緹騎三四人を死亡せしめて魏忠
賢に大きな衝撃を与えたといわれる。この「開説の変」の
具体的な状況についてはすでに田中正俊氏^④がくわしく書い
ておられるのでふれないが、この「開説の変」には東林を

支持する諸生五百余人が彼等独自の階級的立場で参加して
いた。彼等は群衆の実力行動に対しては批判的であつたけ
れども、しかし集つた万余の民衆を代弁して魏忠賢一派の
不法をなじり、周順昌の助命を嘆願したのである。この諸
生のなかには応社の關係者や、のちに復社に組織されてい
つた生員層が多数に参加していた。張溥はこの時、自らす
すんで罪を負つて処刑された顔佩章、馬傑ら五人の勇気を
称揚して「五人墓碑記」なるものを書いてゐるが、彼はこ
のなかで

予、猶お記ゆらく。周公の逮せられしは丁卯（天啓七？）三月に
あり。吾社の行きて士の先となるもの、これがために義を声え、
貲財を斂めて以てその行を送る。（『七録齋集』所収）

とかいてゐる。つまり社の關係者が、諸生の先頭に立つて
周順昌救援のための餼金をうつたえ、周順昌を援助したと
いうのである。また応社の同人であつた楊廷樞、徐汧の伝
にも彼等が士民数千人を倡率して巡撫に面会し、周順昌助
命を訴えて拒否されたこと、また黃尊素逮捕の一行が蘇州
に至るや、激昂した士民は一行の船に放火し、駕帖を破棄
して一時出發を不可能にするという実力行動に訴えたこと^⑤

がかかっている。この「開説の変」は自然発生的におこつた大衆運動であつて、彼等の政治行動ももちろん計画的に行われたものではない。しかし、それにもせよこのような運動に彼等が参加していつたことは、彼等が魏忠賢一派の政治的本質を正しく把握するうえで非常に大きな意義をもつたであらう。それとともにこの運動に参加した生員層のうちに多く復社に組織されていつたという事実が示すように、この運動が東林を支持する生員のなかに、反魏忠賢といふことで急速に連帯感をもりあげていつたことが想像される。応社から復社へ、文学的結社から政治的結社への発展過程においてこの運動のもつた意義は極めて大きいといわなければならぬ。

- ① 田中正俊「民変・抗租奴変」(『世界の歴史』11所収)
- ② 周順昌の逮捕されたのは七年ではなく丙寅すなわち六年二月のこと。したがつてこの年代は誤り。
- ③ 『南疆逸史』巻2

三

さてすでにのべたように応社はその設立当初は十一人、それに実務を担当していた孫淳を加えて十二人で発足した。

この応社を全国的な組織として拡大強化したいという要求が、同人の吳昌時、錢旂から提出され、応社は拡大の意義をこめてやがて広応社に発展する。しかし広応社のもとにおいても、応社という名称が行われたことは張溥が崇禎二年に「詩経応社序」^①をかいていることから想像され、必ずしも公式の名称として行われたのでなかつたらしい。

この広応社への発展がいつ行われたかは明らかでないが、のちにのべるように朱彝尊は崇禎元・二年に成立した復社とは明らかに区別していること^②から応社の拡大発展としての復社の別名でなかつたことは明白な事実であつて、恐らく天啓七年ごろのことではないかと考えられる。

さてこの広応社への発展によつて、応社はまず江北にかなり以前から行われていた匡社の吳應箕、徐鳴時ら十三人、万曆末年からやはりこの地方に行われていた南社の万應隆、沈寿民、沈士柱、劉城らの十六人を自らの傘下に統合した^③。このなかには吳應箕のように両社にともに参加していたものもある。かくして応社は

大江以南、応社を主するものは張受先(張采)、西銘(張溥)、介生(周鍾)、維斗(楊廷樞)。大江以北、応社を主するものは万道吉

(万応隆)、劉伯宗(劉城)、沈眉生(沈士柱)。婁東には応社十子あり。吳郡には応社十三子あり。又五経応社あり。……

(計東・上呉祭酒書)^①

という形勢を来し、江南一帯の文壇にかなりの勢力をもつようになつたのである。なかでも周鍾が安徽地方の読書人に大きな影響力をもつたことは

介生(周鍾)乃ち益々擴してこれを広く。上江の徽・寧・池・太及び淮揚、廬・鳳、越の寧・紹・金・衢の諸名士、みな文を以て郵致す。萊陽の宋氏、侯城の方氏、楚黃の梅氏もはるかに相応和す。ここにおいて応社の名は天下にきこゆ。(『復社紀略』卷一)

といわれることによつても明らかである。陸世儀の「復社紀略」はこの周鍾を中心に応社をのべたものである。このように広応社は現代の結社のように必ずしも統一的に整備せられた組織としてあつたのではなく、文章を紐帯として組織されたグループのルーズな連合であつて、各グループの周辺部に評選を希望する読書人をこめたルーズに組織していたと考えてよいであらう。したがつて上江の応社が、応社と対立する艾南英ともかなり融和的であつたという事実^⑤が示すように、各グループによつてその文学的主張

においてもややニュアンスのちがいをもちこたもあつたわけである。

さて応社もしくは広応社の同人については同人の一人朱隗に、「同社姓氏」なるものが存在したといわれるが現存せず、朱彝尊の『静志居詩話』、陸世儀の『復社紀略』、計東『上呉偉業書』などによつて断片的に知ることが出来るだけである。朱倭女士はこの断片的な史料を整理して二十八名の名簿を作成し、夫々の伝記を収集しているが、恐らくこれ以外にも同人があつたことと思われる。このように応社が広応社として発展し、かなり広い地域的な広がりをもつてきたことは、応社がやがて全国的組織たる復社として改組される条件を具えてきたことに他ならない。

- ① 『七錄齋集』卷二
- ② 五十頁参照
- ③ 『復社紀略』卷一
- ④ 計改亭集卷十
- ⑤ 朱倭「明季南応社考」(『國學季刊』2ノ3)
- ⑥ 同右

四

天啓帝の死去、崇禎帝の即位とともに再び東林の時代がおとづれた。魏忠賢は失脚して自殺を命ぜられ、『三朝要典』は破棄された。そして翌二年欽定逆案が発表され、魏忠賢一派が処分されるとともに、東林派が再び政界に復帰、さらに在獄の諸官僚の罪状の再審査、軍隊派遣の内官の撤退、蘇松等の織造の停止など、曾つて東林党が要求してきたような一連の政策が実現して、まさに新政の御代が謳歌されたのである。

崇禎帝が何故このような思い切つた新政策をとり得たか。それについては帝の義姉に当る天啓帝の皇后張氏の影響がかなりあつたと思われる。張皇后は宦官の政治介入のもたらす悪弊に深く心を痛めていたようである。天啓帝の在位中もしばしば客氏及魏忠賢の過失をのべてその追放を進言し、魏忠賢一派の恨みを招いていた。このため天啓三年皇后が妊娠したときには、魏一派の策謀によつて流産の憂目を見たといわれる。また皇后の父張圉紀が魏忠賢弾劾のデマをとばしたという嫌疑で、疑獄がおこされ、これによつて張皇后を廃しようとする陰謀までたくらまれたようである。^③

天啓七年、天啓帝が死去したとき、皇位継承をめぐつて

両派の間にはげしい暗闘が行われた。魏忠賢の皇位篡奪のうわさも流れていたようである。^④このとき、張皇后は天啓帝の第五番目の弟に当る信王、すなわち崇禎帝に譲位すべく、非常な努力を重ねた。かくして崇禎帝即位が実現するが、帝は魏忠賢一派の毒害をおそれて宮中のものは一切口にせず、外部から食事をはこばせたほど、その陰謀を警戒していたといわれる。このとき崇禎帝は十七歳、年齢的にも、即位の経過からも、張皇后の政治的影響力はかなり大きかつたにちがいない。このことが崇禎帝自身の果敢な性格とも相俟つて、帝に宦官政治の排除という断乎たる政策を遂行せしめるにいたつたものであろう。

さてこの崇禎帝の即位とともに応社の同人も多く科擧に合格していつた。天啓七年には張采、徐汧、周鏞、羅万藻らが郷試に合格し、翌崇禎元年には張溥が恩貢生として国子監学生となつて入京、蔣德璟は翰林院編修、徐汧は礼部主事、周鏞は南礼部主事、張采は江西臨川知縣を夫々授けられた。張溥はこのとき廷対の成績が優秀であつたため、学生たちは争つて彼の面識を得ようとした。張溥はそこで学生を集めて成均大会を主宰したといふ。^⑤ 応社の支部とも

いうべき江北応社が設立されたのはこの時のことであろう。彼は「江北応社序」において

予と楊子伯祥、京師にあるや、時にしたがつてあそぶもの数十輩、皆北方豪傑の士なり。……既にして故城、萊陽、商丘を合して一家となし、かねて応社を以て名となす。

〔七録齋集〕江北応社序

とかいている。

このとき、北京にはのちに幾社、復社に組織される人々が多く在京していた。この在京の人士を中心にいわゆる燕台十子の盟が結ばれた。杜登春の『社事始末』には

是時、婁東の張天如先生溥、金沙の周介生先生鍾、苕苕に明経を以て国学に入る。先君子（杜仁趾）は辛酉の賢書にのぼり、夏彝仲先生允彝もまた戊午の郷薦をもつて偕に燕市に遊び蘭交を締ぶを獲たり。醜類猖狂、緒を絶ち、息を衰めんとするを目撃して、慨然して深結し、百年を樹てんことを計る。先君子は都門王敬哉先生崇簡と燕台十子の盟を倡し、漸く二十余人に至る……

とかかれてゐる。この二十余人というのは、既出の五人のほか、米寿都、徐汧、羅万藻、艾南英、章世純、朱健、朱徽、張采、宋存楠などが参加していた。この燕台十子の

盟は幾社の名士が多く参加していることから、一般に幾社の前身といわれるが、この同盟が魏忠賢一派の絶滅とそのための東林学の復興を標榜^補していること、及びこの同人のうち、のちに陳子龍とはげしく論戦して応社と対立した艾南英を除いて、殆どが翌年の復社に参加していることから、応社、予章社など各社の合作によつて成立した統一戦線としてむしろ復社に連続する面をもつていられると思われ。

- ① 『烈皇小識』巻一
- ② 『明史』一四四列伝
- ③ 孟森『明代史』
- ④ 「崇禎朝紀事」（『三朝野記』所収）巻一
- ⑤ 『復社紀略』巻一
- ⑥ 横田輝俊氏「幾社の成立について」（『支那学研究』14）はこの燕台十子の盟の年代を天啓二年においておられる。しかし、張溥が恩貢生として、太学に入ったのは崇禎元年のことであつて、この年代は当然崇禎元年におくべきであると思われる。

五

さて、このの間もなく、予章社を経営する艾南英と、応社の間にはげしい論戦が展開される。宋文を通じて古文にかえらうとする唐順之、帰有光らの立場を継承した艾南

英は応社の尊経復古が読書人層に大きな影響を与えていくことをころよく思わなかつたのであろう。張溥が、臨川知県となつた張采とともに帰郷し、社事を挙げたと聞くや、旅行中の山東からただちに蘇州に赴き、王世貞の別荘において両者が相見えることとなつた。このとき応社側から専ら応戦にあつたのは、当時新進気鋭だつた陳子龍であるが、この二人の応酬はかなり感情的なげしい調子のものであつたらしい^①。艾南英はこの後も相次いで陳子龍に手紙を送り、^② 応社の復古主義をすどく批判しているが、その主たる論旨はつぎの如くである。

夫れ秦漢は今を去ること遠し。その名物・器数・職官・地理・方言・里俗は皆、今と殊なる。その文を存して以て吾文に見すは、ひとり能くその神氣を存せんのみ……、これを山にたとえんか、秦・漢は則ち蓬山絶島なり。今を去ることすでに遠し。大海あつて、之を隔つがごとく、則ち、必ず舟楫に借りて後、能く至る。夫韓（退之）、歐（陽修）は吾人の文の由つて以て秦漢に至る所の舟楫なり。不佞、方に秦・漢の神氣を得るを以て韓・欧を尊ぶ。足下は秦・漢の句字を竊める者を以て王（世貞）、李（鑾龍）を尊ぶはまた左わざるや……（『天籟子集』巻五 答陳人中論文書）

つづいて艾南英は張溥の評選した「表経」を批判し、^③ 応社のいう尊経が、尊経の名の下に経の恣意的な解釈を行おうとするものであり、経の精神を正しく理解しようとするものでないとして、古人の文章を剽窃する盜賊に比定して応社を誹謗した。これに対して応社側の反論がどのように行われたかは具体的な史料はない。しかし応社の復古が、少くとも、彼らの主観的な意図としては、かかる艾南英の非難するがごときものではなかつたことについてはのちにふれるであろう^④。

さて艾の誹謗に^⑤ 応社側は硬化し、張溥および吳昌時はいずれも張采に手紙を送つて断乎たる処置を要望した^⑥。当時艾南英は江西において社事を主宰し、文壇に非常な影響力をもつており、しかも彼は天啓四年郷試の策論において魏忠賢を批判し、主考官とともに処分されて以来、読書人層に非常な支持を得ていた^⑦。あたかも張采は江西の臨川知県に任ぜられたばかりである。こうしたことに對する政治的な配慮もあつたのであろう。張采は婉曲に艾南英に反省を求めたけれども彼は全然妥協の色をみせず、遂に両者は決定的な決裂に至つた。この艾南英との論戦が復社設立への

大きな刺激となつたことは疑いえない。

- ① 『陳忠裕公集』年譜崇禎元年の条。
- ② 艾南英が前後四回陳子龍に送つた手紙は『天慵子集』所収。
- ③ 五十四頁参照
- ④ 両者の手紙は『復社紀略』卷一所収
- ⑤ 『復社紀略』卷一

六

さてそこではいよいよ復社の成立に入るわけであるが、応社から復社への発展はしかく順調に行われたのではなかつた。復社は最初、応社とは一応別個に組織されたのであつて、しかも設立当初、両社は対立関係にあつたのである。

復社の設立者であつた呉翮の女婿に当る計東は、順治年間、『復社紀事』の著者呉偉業に当つて、彼の著作が応社に言及していない事実を批判した手紙を送つているが、このなかで彼はつぎのように云つてゐる。

始、庚午(崇禎三年)の冬、魚山熊先生、崇明より我邑に宰たりて最も社事を喜ぶにより、孫孟樸は乃ち我が婦翁(呉翮)及び呂石香輩数人と始めて復社をはじめ、頗る呉門楊維斗先生の不快とする所となる。孟樸は常に刺を懐にして楊先生に謁せんとし再び往き

て見るを得ず。之に呵して「我社中、未だ嘗つてこの人あるをみず」という。我社とは応社なり、……当日紛々たる社集、南彥天下善人文聚(補②)(?)の諸書の如きは、復社の國表一集、三集、四集と頗る相齟齬す。ただ西銘先生(張溥)のみ一人大公無我にして、後起を吸引し、且つ魚山先生の復社を主持するの意を推す。故によく応・復両社の人を合して前茅後勁の勢をなす。……

(『上呉祭酒書』一『計改亭集』卷十所収)

復社の成立年代については種々問題があるけれども、のちにのべるように各社の統一組織としての復社の成立は崇禎二年(己巳)であり、孫淳らの復社の成立は当然それ以前でなければならぬ。また熊開元が呉江知県として着任したのは、蘇州府志職官によれば、あきらかに崇禎元年のことであり、庚午冬というのは、戊辰(崇禎元)冬の誤りであると思われる。王応奎は柳南隨筆において復社に言及しているが、やはりこの計東の手紙によつたために、同じ誤りを犯している。^①

さて復社はこのように、呉江知県となつた熊開元の支持を得て、孫淳を中心に数人で結成されたもので、そのうち姓名のあきらかなのは、呉翮、呂石香、呉允夏、沈応瑞で、

このなかには応社のメンバーの名前はみられない。ただ陸世儀、吳偉業^③によれば、張溥はこのとき、熊開元に招かれて吳江にあり、巨室吳氏沈氏の諸弟子は張溥にしたがつて遊学したといわれる。この吳氏が吳翮であることは、計東が指摘するごとくで、あるいは張溥は彼等を通じて復社の設立に関係していたかもしれない。とすればさきの計東の手紙にみられる、復社の設立をめぐるつての応社と復社との感情的な対立は、張溥のこうした分裂行動に対する楊廷樞の不満ではなかつたかという推測もされる。

また、孫淳は応社設立以来、応社の実務面を担当して献身的な活動をつづけてきたが、彼は、他の十二名の評選担当者とは別格に、たんなる「五経徴文の人のみ」として、正式のメンバーにも加えられていない事実^④から、あるいは孫淳の側に多少不満があり、復社設立への契機となつたのではないかという推測もされる。いずれにしろ、決定的なことは明らかではない。

こうした対立に直面して張溥はただちに調停にのり出し、応社を復社に合流させるというかたちで両社の統一を実現させた。

翮（吳翮）は同志孫淳とともに頼めて復社をなす、……溥は応社を挙げてこれに合併す。
（楊鳳苞『秋室集』巻五）^⑤

といわれる通りである。しかし計東のいうごとく、国表の四集あたりまでもその対立がつづいたとすれば、旧応社と復社との関係はその後も必ずしもスムーズにいつていなかつたのであろうか。このように、応社から広応社、広応社から復社への発展過程は非常に複雑であるがこの過程を最も要領よく跡づけた信頼し得る史料としてまず朱彝尊の『静志居詩話』をあげることができる。ここで朱彝尊はつぎのようにいう。

文社に至りてははじめ天啓甲子（四年）、吳郡、金沙、橋李を合して僅かに十有一人……五経文字の選を分主す。奔走を効して厥事を裏くるものは嘉興府学生孫淳孟樸なり。これを応社という。そのはじめに当りては取友なお隘し。米之（吳昌時）、彦林（錢解）、これを推大して四海に訖らせんとす。ここにおいて広応社あり。

……声氣の孚^ふなること応社よりはじまる。崇禎の初、嘉魚の熊開元吳江に宰たり。諸生にすすめて講芸す。時に孟樸里居して吳翮扶九、吳允夏去盈、沈応瑞聖符等と結び、復社を肇め挙ぐ。時ににおいて、雲間に幾社あり。……浙西に聞社あり。江北に南社あり……歟、吳に会し、復社に統合さる。復社は、戊辰（元年）には、じ

まゝ、己巳(二年)になる。(『静志居志話』卷二十一孫淳の条)

この朱彝尊の詩話が、すでに散佚した楊彝の『復社事実』によつたらしいことは、道光年間に出て来た吳偉業の年譜^⑥、これと全く同文の記事を、『静志居詩話』とあきらかに區別しながら、楊彝の『復社事実』として引用していることによつて推測される。楊彝というのはすでにのべたように応社設立以来の復社の有力な同人であつて、その著書は当然復社に関する基礎資料となるべきものである。さらに、朱彝尊は復社成立のさいの財政的な支持者であり、且つ同人であつた吳翀と相当近い姻戚關係^⑦にあり、復社の事情についてもかなりくわしかつたと思われる。この彼が復社事実を転引したとすれば、朱彝尊のこの文章のもつ史料価値はきわめてたかいといわなければならない。そして陸世儀の『復社紀略』の本文は、この復社の崇禎元一二年成立説をあきらかに裏づけながら、つぎのようにいつている。

(元年)吳江令熊開元、文章経術を以て治をなし、知人下士、天如の名を慕いて迎えて邑館に至る。巨室吳氏沈氏諸弟子俱にこれに従いて游学す。ここにおいて尹山大会を為す……このとき江北の匡社……、中江の端社各々壇壝を分つ。天如(張溥)乃ち諸社を

合して一となす…… (『復社紀略』卷一)

ところが、奇妙なことに『復社紀略』の前に附されている復社の年表ともいうべき復社総綱は崇禎五年の条に

虎邱大会。張溥は盟主たり。諸社を合して一となし、名を復社と定む

と記している。これを根拠として崇禎五年各社の統合組織としての復社が成立したとする説^⑧もある。しかしこの復社紀略は鈔本として清末までは伝わつたもので非常に誤謬が多いが孤本であるために校定が加えられなかつたと鄧実も後記しており、したがつてこの復社総綱は鈔本として伝わるうちに何者かによつて書加えられたが、その際、当然二年尹山大会の下にいくべき復社成立を、誤つて五年虎邱大会の下に挿入したのではないかと思われる。

ちなみに『復社年表』^⑨を著わした程穆衡は非常に考証を好んだ人といわれるが、復社紀略の本文を採用して尹山大会の時に統合が実現したという説をとつていることも、これを裏付けるものである。ただ『復社年表』はすでに散佚して現存しないことが惜しまれる。

さてこのように復社は、崇禎元年一応社とは別個に成

立したが、張溥の調停によつて応社を合併し、後年の復社の基礎を確立した。そして翌二年にかけて、江北の匡社、中江の端社、松江の幾社、萊陽の邑社、浙東の超社、浙西の莊社、黃州の質社、浙西の開社、江北の南社、江西の則社、雁亭社、席社、崑陽社、雲巒社、吳門の羽朋社、武林の読書社、山左の大社など、各地の群小の文社を復社に統合して尹山大会を開き、ここに全国的な統一組織としての復社が成立したのである。

さてこの時松江の幾社が復社に統合されたかどうかについては稍問題がある。幾社はしばしば復社と併び称せられる、明末の文社のうちでは比較的有名な結社であるが、この幾社の領袖であつた杜麟徴の子、杜登春が、幾社を中心に明末の社事をのべた『社事始末』において

天如・介生、復社国表の刻あり。復とは絶学を興復するの義なり。先君子と彝仲（夏允彝）、幾社六子会義の刻あり。幾とは、絶学再興の幾あり。幾を知るはそれ神の義なり。両社の対峙、せしは、皆己巳の歳（二年）よりおこる。……先君と会稽先生の意は簡蔽を主とし、ただ漢宋の禍苗、我身を以てこれに親まんことを恐る、故に復社と並び称するを欲せず。自ら一名を立て、取友会文の實事

をつくす。幾の義はここにおいて寓す。といつていることから、復社の幾社統合について疑問をいだく説がある。

しかし、さきにあげた朱彝尊の静志居詩話、陸世儀の復社紀略は、その統合した文社の名称においてはその取捨をかなり異にしなから、しかも両者ともに松江の幾社をあげていること、しかも前史料の史料価値はかなり高いとみられること、幾社設立の年代は明確でないが、しかし幾社設立に参加した六人、すなわち夏允彝、周立勳、徐孚遠、彭賓、陳子龍、杜麟徴の六人は全部復社の第一回の尹山大会に参加していることなどから、やはり幾社は一応復社に統合されたとみるべきではなからうか。

それではなぜ杜登春が復社幾社の対立がすでに崇禎二年に生じているとして暗に復社の幾社統合を否定するようなかき方をしたのか。たしかに幾社が復社に参加しながらも、その性格はやや閉鎖的・非政治的で、復社から次第に乖離していつたこと、幾社の同人が復社の政治活動に対して批判的であつたことは事実であり、杜登春自身の記述もやはりその偏向をもつている。杜登春自身がかいてるように、

「復社」が政治団体としてかなり危険視されていた清朝初期にあつてはそれも止むを得ないことであつたろう^⑩。

杜登春は崇禎二年生れであり、幾社の始末についても、もちろん清朝になつてから、幾社の同人たちの伝聞によつて、その歴史を書いたのであるが、この場合、幾社の同人たちが復社との対立を故意にさかのぼらせ、復社との無関係を強調したこともあり得るであらう。したがつて幾社領袖の子供であつた杜登春が幾社の歴史に関して無意識にその誤りを犯したことも容易に想像される。こうした党争の場合、関係者の書著わした史料は、必ずしもその史料的価値をたかく評価することは出来ないと思われる。

かくして復社の各社統合が実現するが、その組織形態はどのようなかたちをとつたか。

謝国楨氏は復社を各文社の連合組織と考えられている^⑪。復社に組織せられた各文社については幾社、読書社以外ほとんどその内容を知ることが出来ず、したがつて復社成立後の各社の動向はあきらかではないが、幾社や読書社はその後も独自の活動をつづけており、これらの社に対して復社が上部団体としてそれほど指導性をもつていたようにも

思われぬ。しかも復社は社単位の団体加盟ではなく、一応形式としては個人加盟の形式をとつており、各府ごとに設けられた社長が、社友間の統制、連絡に当ることになつている。したがつてその設立当初の意図としては、各文社をこれに発展的に解消せしめてかなり強固な統一的組織を作ることが期待されたのであらうが、事実上は五経応社のなかでも、楊彝・顧夢麟などのやつていた詩経応社の系統や、幾社、読書社などの系統は、一応復社に参加しながらも、それほど強い拘束をうけることもなく、その独自の活動をのこしていつたのではないかと思われる。

- ① 『柳南隨筆』卷三
- ② 『復社紀略』卷一及び『復社紀事』
- ③ 計東、上呉祭酒書
- ④ 計東、上呉祭酒書
- ⑤ 謝氏前掲書所引未見
- ⑥ 顧師賦編梅村先生年譜（『梅村家藏稿』所収）六十四頁参照
- ⑦ 『アジア歴史事典』復社（酒井忠夫氏担当）
- ⑧ 『晚明史籍考』卷六
- ⑨ 程穆衡『梅村編年詩箋註』卷一哭志衍註
- ⑩ 以上『復社紀略』卷一

- ⑫ 以上『静志居詩話』卷二十一孫淳の条
 ⑬ 横田輝俊氏前掲論文
 ⑭ 『復社紀略』卷一尹山大会参加者名簿
 ⑮ 本稿次号参照
 ⑯ 謝氏前掲書一六一頁

七

復社の「復」が易の卦のひとつであつたことは、孫淳らのはじめた復社について

翻(呉翻)は同志孫淳等四人とともに頼めて復社をなす。義は「剥窮りて復」にとる。(楊鳳苞『秋室集』卷五)^①

といつてゐることによつてあきらかである。「剥窮りて復」とは易の卦についていつたもので、つまり根元にかえること、古えに復帰することを意味する。古えに復帰するとはどういふことか。杜登春は

復とは絶学を興復するの義なり(社事始末)

としてゐる。《経を尊び、古えに復する》とは応社以来のスローガンであつた。しかしそれはたんに文学としての経の文章を復活させることを意味したのではなく、まして艾南英が非難したように経の文章を剽窃し、経の文章の形式だ

けをひきうつすことを意味したのではなかつた。張溥は文章をかくことにおいて自ら辿つた遍歴をつぎのようにならべて書いている。

文を為るの一端に至りては、余、凡て教たび従る。受先(張采)彈毫の始は、道理をいい、繩墨をひき、全て識を以て相長するをよろこぶ。初め、子を事とし、ついでは経を事とす。またついで経の大意を事とし、己れが本有にとる。受先(張采)はつねに余に勉むに安静にして題に対し、これを人身に準ずれば、自然良心内、生、和し、氣、動し、潑引して文と成る。

(『七錄齋集』卷二 張受先稿序)

つまり、張溥は最初諸子に学び、ついで六経に学んだ。そして六経の文章の形式ではなく、六経の大意に学んで、己れのなかに本来的にもつてゐるものを引出して、自然良心内にわき出でたものを文章に表現しようとしたというのである。こうした彼自身の経験をもとに、彼はつぎのような教育の方法をあみ出した。

今日、武健の子あり。日ごとに五経を取りて慕してこれを書かしむれば、左右周接するもの、鉅人の名、大雅の字にあらざるはなく、趨りて善にゆくや疾し。いわんや、意に相漸いて、尤も神明ある者をや。……初にしてその語言を事とし、これを久しくして

その行い是なり。またこれを久しくしてその性情、是にあらざるはなし。……
 (『七録齋集』卷二 房翰表経序)

最初のうちは、もつばら経の文章をひきうつさせる。これを何度か重ねているうちに、経のもつ意味が理解できるようになり、行為が正しくなつてくる。そしてそれを重ねていくうちに人間の性情そのものが正しくなつていこうと
 いうのである。文章とはまさにそうした人間本有のものが
 # 生和し、気動いて # 自然に流露したものでなければなら
 ない。彼はまた

奇を好みば則ち必ず古えを知る。古えを知れば則ち必ず経を知る。経を知れば則ち必らず人たる所以を知る。人たる所以を知るにいたつて、文、已にことごとく精なり。ゆえに駭にして不純の文は予の基だにくむ所なり。才にして不徳の士もまた予の基だにくむ所なり。
 (『七録齋集』卷二 程墨表経序)

ともいつている。経とはまさに人の # 人たる所以 # 人間の本来あるべきあり方を示したものに他ならぬ。この六経の精神をぬきにして文章の形式や方法を考えることはナンセンスだといふのである。しかし、評論家が必要しも最上の小説家でないのと同様、彼がこのように主張したといふこ

と、あるいはこの文学的主張に則つて文章を評選したといふことと、彼の文章がそうであつたといふことは一応別個のことであつて、彼の文章には、文学には門外漢の私でさえ不自然と感ぜられるような独特の調子があつて非常に読みづらい。そういう点であるいは艾南英の批判が当つていふ点があるかもしれない。

このように彼らは六経の精神を理解することによつてあ
 るべきものとしての古人の「性情」への復帰を考えただけではなかつた。六経というのは個々の人間の性情のあり方にかかわる以上に、より大きく政治制度のあり方にかかわるものであつた。張采は張溥の七録齋集に序文を寄せて
 経を窮めれば王道を明らかにし、史に通ずれば王事著わる。王道を明らかにすれば、与に体を立つべく、王事を著らかにすれば与に用に適うべし。
 (『七録齋集』統集序)

といつている。彼らにあつては、経とは王道を明らかにして政治の体をたつべきもの、すなわち政治のよつてたつべき精神、あるいは原理を示すものであり、史とは王事をあきらかにして用に適うべきもの、すなわち政治の変遷のあとをあとづけて、政治の方法を具体化するものと考えられ

たのである。張溥のもとに招かれた張采は、戴氏の学にくわしく、夙に学界に声名を得ていたといわれるが、張溥はその張采の「礼質」に序文をよせて、

夫れ周礼・儀礼はすでに闕失の余を以てその深微の意を得がたし。……曲礼、また篇什の寡を以て、一經の用を窺う能わず。授受更定を欲し不可なる所あれば、則ち往古論礼の文に求めて、左右相及び、一身を整め、家國を理む者、これが為に表著す……しかりといえども前によりてこれを云えば略、後によりてこれを論ずれば詳、三礼の書は諸記の文を包むに及ばず、諸記の文は常に三礼の説に應ずるを得。今の礼記を以て天下に詔せるは、三礼を廢するにあらず。以て三礼を詳かにせんと欲するなり。浅末の倫、安常に徂み、遠議に務めず。遂に一經の言をしてその彼此を異にし、古人の制をして日ごとに絶曠せしめるは亦悲しからずや。

〔七録齋集〕卷一 礼質序

といい、現存する經典が不完全な場合には過去の礼を論じた文章を集めて、相互に検討して、經典そのものにたちかえつて、「一身を整め、家國を理むべき」原理としての古人の制度を復元していかなければならないという立場をあまりかにかにしている。

しかもそれはあくまで政治の原理であつて、政策そのもの

のではない。彼は政治制度の理想型を經典のなかにさぐるとともに、この政治制度の変遷のあとを歴史的にあとづけることによつて、現実にも最も適應する政策を追求しようとしたのである。張溥自身の『史論』二編十卷をはじめ、復社の同人たちが好んで用いた史論という形式を通じての政治論議は彼等においてまさにこのような現実的な意味をもつたのであつた。また『皇明經世文編』五〇四卷は幾社系の人々、陳子龍、徐孚遠、宋徵璧らが編纂、徐光啓の『農政全書』もまた陳子龍が整理して出版に至つたもので、いずれも張溥が序文を附している。こうした編纂出版の事業のなかに、彼らが現実に対してもつたなみなみならぬ經世的関心がうかがわれよう。

さて、清朝の学問の基調となつた經学と史学はこのような実践的意慾に支えられて復社のなかに復興させられたのであるが、彼等の学問の方法はすでに張采によせた張溥の序文があきらかにするように、たんに、経や史を主観的に理解しようとしたのではなかつた。応社以来、詩経を担当していた楊彝、顧夢麟の学問の方法について、張溥は次のように云つている。

蓋し、嘗つて昔人の書を聚めて讐析して比講す。高きこと日月よりして、細は毛羽、大にしては王制、瑣にしては衣冠にいたるまで、その遐思をよせ、その美拙を徴せざるはなし。古の尺量と今の尺量何如を量り、古の道里と今の道里何如をはかり、譌なれば難あり。隠なれば証あり。事の沿うて反らざる者、条指してこれを直し、人の概然として以て屈する者、反覆して以てこれを切す。故に惑い百世にありて一日にして以てあきらかに、千千の夫、その慮を異とせずしてひとり晝然として以て出づ。

（『七録齋集』巻一 楊顯二子小言序）

とこの実証的態度を称揚している。また彼等の、道を講ずるのでなく、経を講ずるといふ立場から、経により近いものとして漢儒の伝註に依拠しようとする漢学への指向が^④すでにみられたことはすでにのべたごとくである。しかし、張溥自身には、考証的方法を用いた著作は存在しない。

復社に統合された読書社における学問の方法はさらに一層実証的であつた。「読書社」という社の名称自体がすでに読書博學をきわめて重視する彼等の学問的立場をあきらかにしているが、この社においては一ヶ月に数回づつ会合をひらき、数人が集つて一つの經典を会説、数日かかつて

やつと一義を検討しおわるといつた敵密な論証が重ねられた。^④ 黄宗羲は読書社の領袖であつた張岐然の学問の方法についてつぎのようにいつている。

仁菴の読書するや、齒、糸、牛、毛といえども、異同を訪、辨す。余、とき十三經註疏をよみ、意を名物、象数に刻す。江道闇は以て不急なりとしていわく。爾雅を註するものは必ず稊落の人にあらざと。ひとり仁菴と余と志を同じうす。余は漢の地理志を疏し、仁菴もまた左氏地理を疏す。余、律呂教義をあらわすや、仁菴、薄子珉、魏子一と余杭の竹管肉好均しきものをとり、截りて十二律及び四清声とし、これを吹きて以て黄鐘を定む。また区田の法に倣いて、これを山中にこころむ。仁菴の好古にあつきことかくの如し。

（『南雷文約』巻二 張仁菴先生墓誌銘）

このように読書社における学問のなから、経に對する事實的関心がうまれてくることは注意されるべきであろう。

こうした事實的関心に支えられて、読書社における読書は全く精緻をきわめていた。こうした読書社における学問について、黄宗羲は別の個所で、

武林の読書社は經學に通ずるの士多し。其議論たるや、經生の學、口角を熟爛するにすぎず。聖經賢史古今治亂の端、漫として何物たるやを省りみず。

（『南雷文定』巻四 高古処府君墓表）

と批判もしている。しかしこの読書社の学問のなかでも、特に礼の研究が特別な比重を占めていたことは、その同人の伝がしばしば礼の研究方法来に言及していることによつても知られるが、礼というのは学問のための学問として、所謂考証学の対象とせられたのではなく、制度的な関心とふかくつながりあうものである。⑤ 読書社における礼に対する関心のふかさは、やはり実学実践をきわめて重んじた浙東の学問的な伝統をふまえた彼らの実践的関心の度合を示すものといひ得るのではなからうか。

崇禎六・七年ごろ、読書社の研究に参加した黄宗羲は思旧録のなかでこんな思い出を語っている。彼は曾つて読書社の領袖である馮慄の家に泊つたことがあつた。たまたま話が楊漣・左光斗のことに及んだとき、その門人顧豹文は彼等の何人なるやを知らず、どういふ人物かと質問した。このとき、馮慄は色を正して「読書する者はまさに当代の人物を知るべし。もし一向に理会しえずして、読書してなんの用をかなさんや」と弟子を叱りつけたといわれる。このような逸話は、もつとも考証的と考えられる読書社の学問さえ、決して現実的関心をはなれるものでなかつたことを

示している。さらにのちにのべる留都防乱掲事件にさいしても、読書社の主たる同人のほとんど全部がこれに署名している事実は、彼らの学問が、清朝の学問がさうであつたように、現実からの逃避を意味したのでなかつたことを裏付けるものといえよう。この読書社はやがてのちには仏教の影響をうけ、研究組織としての性格を失つてしまふが、このような学問的方法は康熙年間の講經会にもうけつがれ、その本来の実践的関心を骨抜きにされつつ、清朝の考証学へと発展するのである。

また淮安、山陽の人張致中は、復社設立とともに同郡の人々、白受操、方能権らとともに、復社に参加したが、彼は「尊經博古」を標榜し、家は非常にまづしかつたけれども、金石文を多数所蔵し、音韻学にもくわしかつたといわれる。彼の子、張昭（字力臣）は六書にたくみで、各地を旅行しては拓本をとり、考証を行つた。顧炎武は音学五書の文字を、彼に刻してもらふことを願つて、それを果さなかつたことを遺憾に思つていたといわれる。⑥

このように復社に属した特定の社なり、特定の個人のもつていた考証的学風は、もちろん復社の学風そのものでは

ない、そしてこのような学問も、このときになつてはしまつたものではなく、いつの時代でも、一部の地域なり、人々なりによつて行われていたものであるかもしれない。

しかしこうした人々が、「尊経復古」を標榜していた復社に組織されることによつて、相互に刺激しあいながら、その復古主義の内容をゆたかにしていつたことは疑い得ないであろう。たしかに復社の復古主義はそれ自体としてはきわめて未成熟なものではあつたけれども、こうした夫々の地域に行われていた復古主義的な学問を強力な政治力で組織していくことによつて、ひとつの社会的な潮流として発展させた、その意義はきわめて大きいといわなければならぬ。

- ④ 謝国楨氏前掲書所引 原本は未見
- ③ 『復社紀略』卷一 四十頁参照
- ② 『康熙錢塘県志』文苑伝張芬朱俊女士前掲論文所引
- ① 島田虔次氏「章炳麟について」(『思想』四〇七〜四〇八)
- ⑥ 『復社姓氏伝略』

八

さて復社のもつていたこのような思想的立場は、復社の綱領のなかにおいて明確に打出された。その課程にはつぎのようにいう。

世教、衰えてより、士子は経術に通ぜず。但、耳を剽し、目を眩き、幾ど、倖に有司に戈獲せられんとするのみ。明堂に登りて君長に致すあたわず、郡邑に長たりて沢民を知らず。人材、日ごと下り、吏治日ごとに偷まるは皆これによる、薄は徳をはからず、力を量らず、四方の多士とともに古学を興復し、異日、つとめて有用をなさんとし、よつて名づけて復社という。(『復社紀略』卷一)

このような復社の課程のなかには、
輩殿に官たりて、念頭君父の上にあらず。封疆に官たりて、念頭百姓のうえにあらず。(『小心齋劄記』卷十一)

と官場の腐敗を嘆じた顧憲成の言葉がそのままに生きている。張溥は、「吾、以て東林を嗣げるなり。」と自ら称していたといわれるが、復社はその設立当初、応社を改組することによつて東林の伝統をうけつぐといふことを明確に意識しつつ、設立されたのではないかと思われる。

復社が設立された崇禎元年から二年にかけて、崇禎帝の即位によつて実現した崇禎新政は早くもその本質を暴露しようとしていた。元年の末には奄党温体仁一派の策動によ

つて錢謙益の免職が行われ、ついで二年には袁崇煥事件、

及びそれに伴う東林系官僚の連坐など、まさに東林、非東林の勢力関係が逆転し、崇禎期における内官派の主動権が確立されようとする時期であつた。開読の麥、顧秉謙^補彈劾など内官派に抵抗する政治運動の經驗をもち、しかも元年には北京において燕台十子の盟を結んで、内官派に対する抵抗を確認していた応社の同人たちが、あたかもこのような時期に各文社の大同團結を実現させたことは、復社がかなり明確な政治意識をもつて設立されたのではないか、すなわち、応社から復社への改組が内官派に対抗するための組織の強化としての意味をもつたのではないかということ想像させる。そのゆえにこそ、この課程のなかには、いつでも救國運動に立上つていこうとする彼等の姿勢が明確に反映されているのである。

さて復社に加盟するためには、さらにつぎのような規約にしたがうことを誓つた。

匪彝に従うなく、聖書に非ざるを読むなく、老成人にたがうなく、己が長を矜るなく、彼が短を形すなく、巧言もて政を乱すなく、干進もて身を辱しむなし。嗣今以往、犯す者は、小は用つて諫め、

大は則ち擯す

〔復社紀略〕卷一

と。このような課程及び規約は、復社がたんに文章の評選のみを紐帶とした読書人の集合でもなければ、所謂「朋党」でもなく、特定の目的を以て結成された、閉鎖的な一つの「組織」としての性格をもつものであつたことを明確にものがたつている。その意味で、それは近代的な意味の政党の發生であつたということが出来よう。ただその「組織性」が事実上どの程度貫かれたかは問題であるけれども。

さて復社は以上のような規約に基いて各府ごとに社長をえらび、社友間の統制、連絡などのことに当らせた。しかし、事実上は既存の文社を利用しつつ、統制が行われたのであろう。このとき、自らすすんで組織面の困難な実務を担当したのが、応社以来、実務を担当してきた孫淳であつた。張溥は孫淳の活動についてつぎのようにいつている。

三年の間、もし孟樸なくんば、その道、ほとんど廢る。……孟樸はすでに一社の人文をあげて頭書して大いに刻す。又來者の日に広くして渙然として麗る所なきを恐れて、先にその姓名を定めて以て籍となし、予に属してこれを存せしむ。その淮泗を渡り、齊魯を渡りて長安にゆくや、天下都會の賢者遇わざるなし。苟くも

その人に遇わば、必ず一郷の傑然たる者を挙げてこれを社に登す。また旧聞の実ならざるをおそるゝや、必ずその生平を断して、後、進む。あゝこれを求むること、かくの如くそれ亟かなり。これを慮ること、かくの如くそれ至れり。……すべてかの所謂豪傑の士なる者はみな吾社の人なり。〔『七録齋続集』巻一 社籍序〕

とのべている。このように孫淳は候補者名簿を作成しては、ひとりひとり入社を勧告して社に組織していくという、足にまかせての困難な組織活動を一手にひきうけた形だつたらしい。しかもそれはたんに文章を集めるといつたものではなく、その人物の平生の行動についての調査まで行つたうえで入社させたといわれる。陸文声は入社も希望して拒否されているが、こうしたことも復社の組織性的一端を示すものといえよう。

さてこのようにして成立した復社は、崇禎二年には尹山大会、三年には金陵大会、五年には虎邱大会と三回の大会を開催し、そのとき集つた文章を『国表』一・二・三集として出版した。大会はこの三回にとどまつているようであるが、『国表』はその後もひきつづき編纂され、五・六集まで出版している。この復社の参加者名簿は（一）陸世儀・

復社紀略（一）呉翻・復社姓氏録、（二）呉応箕・復社姓氏前後

の三種類が現存する。（一）は第一回の尹山大会の参加者、（二）

は第一回、及び第二回金陵大会のものとも、或いは第二回

及第三回虎邱大会のものとも称せられ、各地域毎に二部に

分れる。第一集と称せられる部分の姓氏は、陸本の姓氏と

かなり近いが、人数からすれば陸本の約二倍を収録してい

る。（三）の前巻ともかなり重複するが、異同も多い。また（二）

の二部、（三）の後巻の収録の姓氏は全然別系統のもので、（二）

と（三）の間には全体として約1/3の姓氏の異同がある。（三）

は呉応箕が直接関係した第三集（第五集（時期不明））といわ

れ、これに呉応箕の孫吳銘道が、呉翻本によつて補訂した

補録一卷が附されている。また（二）の第一部、第二部、（三）の

前巻、後巻の各本内の二部分には原則として相互に重複す

るものはない。したがつて（一）の第一部及び（二）の前巻は第一

回もしくは第二回の参加者名簿を基礎として作成され、第

二部及び後巻は、夫々その後の参加者の補充名簿として作

成されたか、あるいはある社集を二部分に分類しただけで

あるのか、さらに両本の関係はどうなのかに至つては目下

一度刊刻されており、この時すでに官途についていた者は省かれていた。そこで吳銘道が吳翻本によつて補訂したわけであるが、しかしこの補訂も非常に不完全である。したがつていづれも復社名簿として完全なものであるとはいへないが、復社参加者を前記三書によつて各本ごとに集計し地域的に分類してみるとつぎのようになる。地域的分布の状態を知る手がかりとならう。

さてこの表があきらかに示すように、いづれの場合においても南直および浙江が最も多く、両省で全体の半数以上を占め(表Ⅰ)、しかもそのなかでも蘇州、松江、杭州、嘉興、湖州の五府がずば抜けて多い(表Ⅱ)。

表Ⅰ

	陸世儀本	吳翻本	吳応箕本
直南	218	858	1230
北直	0	33	50
浙江	178	440	520
江西	126	330	386
福建	40	173	270
湖廣	61	227	242
山東	20	74	97
東廣	14	42	150
南河	8	38	27
山西	4	7	14
陝西	1	0	5
四川	3	8	8
廣西	0	1	1
貴州	1	1	4
雲南	0	0	1
計	674	2232	3005

(なお吳応箕本のあきらかに重複した姓名は除外した。)

表Ⅱ

	陸世儀本	吳翻本	吳応箕本
蘇州府	91	332	507
松江府	41	102	138
杭州府	3	104	122
嘉興府	66	140	160
湖州府	87	90	112

ば問題にされる、まさにその地域である。

復社の背後にはあるいはそうした商工業の発展に伴う新たな社会勢力の形成があつたかもしれない。曾つて指摘したことがあるように、開説の変には多くの商人層が参加していた^④こと、復社のオルガナイザーであつた孫淳が、明代急速に商工業都市化していつた震沢鎮の出身であつたこと、復社の中心となつた太倉では棉花などという商業的作物の栽培が広範に行われていたこと、などの事實は、これを示唆している。しかし、復社の同人自身がこうした生産に直接的にタッチしたという例は、少くとも史料の面には出てこない。

この五府のうち、その東部・北部に当る蘇州から松江にかけての丘陵地帯は棉花栽培、棉織業の中心として、西部の湖州、嘉興、杭州一带は蚕蚕および絹織物業の中心として明中期以降、急速に発展した地域であり、近來資本主義萌芽の存在がしばし

それでは彼等自身の出身階層は何であつたか。まず張溥についていえば、伯父の輔之は南京工部尚書、父の翊之は太学生で太倉でもかなりの地主であつたようである。しかし兄弟十人のうち、彼は婢を母とした庶出子であつたため、一族から軽蔑の目でみられただけでなく、とくに伯父の僕、陳鵬、過峴からさえも軽んじられた。このうち陳鵬は「筆劄をよくし、主人の章奏書牘は皆其手に出づ」といわれ、過峴は「聚斂に長じ」、「内外の家政は事、大小となく、必ず兩人によつた」という。したがつて二人は奴隸とはいつても主人に代つて上奏文や、手紙の代筆をしたり、財産の経営に当つたりする所謂「紀綱の僕」であつたわけである。この二人は張溥の父がかれらに主人格でふるまうといふので非常に反感をもち、張溥の父を傷つけたことがあつた。張溥は血書して報復を誓つたが、二人は庶出子に何が出来たものかとあざわらつたといわれる^①。

当時この地方では、このような奴僕をつかつて、家計管理を行わせるようなかなり寄生化した官紳地主が多かつた。彼等はこの奴僕に、小作料収奪や、商業・高利貸経営の責任を負わせたり、あるいはこの奴僕を胥吏として支配機構

の末端に送りこむことによつて、農民を支配していた^②。地主権力は具体的にはこの奴僕を通じて農民の上に重くのかかつていたのである。張溥自身はこのような官紳家庭に出身していたのであるが、母親が奴婢であつたため、庶子として奴僕からさえ軽蔑されるような生活環境に育つたわけで、奴僕横暴に対して非常にけしき憎しみをいだいていた。のち彼は陳・過の二奴を処刑したばかりでなく、陸文獻の僕で、胥吏として民衆を苦しめていた董寅卿なる者を、按察使とはかつて処刑するなど、地方官が断乎たる方針をもつてのぞむよう圧力をかけ、このために「呉下の薄俗は一変した」という^③。

しかもそればかりではなかつた。張溥は奴隸身分から解放されようとする奴僕に対しては全面的な援助を惜しまなかつた。

復社の同人のなかに張麗なる者がいるが、彼は、王錫爵の一族呉世容の僮僕であつた。若くして復社の趙自新に学び、復社への加入を希望していたが、呉世容はこれを許さず、相かわらず、秘書として筆写などに当らせた。彼はこれを恥じ、張采のもとにのがれたが、呉は彼の父母を拘留、

彼は再び家族をあげて復社の呉昌時のもとに投じた。張溥、張采は贖金を準備し、知州を通じて奴隸身分解放の努力をしてやつた。呉は知州の圧力に屈したものの、内心すこぶる不満であり、とくにその伯父で画家として有名だった王時敏は僮僕千余人を所有していたため、復社に対してすこぶるふくむ所があつたという。

この場合、張嘉の主人、呉世容らの一族が元來復社とは対立関係にあつた事情も当然考慮されなければならないが、しかしそれにもせよ、主人の奴隸に対する人身的支配の抵抗に、復社人たちが協力することによつて、多量の僮僕を擁する官紳地主と鋭く対立していつたことはやはり注目されるであろう。そしてこのことがちに復社弾劾のひとつの端緒となるのである。^⑩

また周鍾は金沙の望族である。祖父于徳は万暦の進士、伯父周応秋は天啓年間の吏部尚書で、魏忠賢に附して逆案の際処分されたが、父紹詩は久しく諸生に苦しんでいる。応社以来の同人周鍾とは従兄弟。周鍾と伯父応秋との関係は非常に悪かつた。^⑪

陳子龍は青浦の人。父所聞は工部屯田郎。祖父善は烏寇

入犯に際して僮奴二百人を率いて撃退したという。その祖父の死に當つて、彼は僮奴を督励して喪礼をとどこおりなく行つたというから、やはりかなりの僮僕を擁した地主であつたらうか。^⑫

応社に参加し、のちの復社の中心となつていた人々の出身については、このほか楊彝が経済的にゆたかであつたというほか、具体的な史料のあるものは少い。

つぎに復社の設立に参加し、それを財政的にバックアップしていた呉江の呉翮についてみよう。彼の家は呉江の巨室であつたと称せられ、復社設立のさいには白金二十鎰(四八〇兩)、穀二百石を醸出して、その組織活動を援助した。彼の女婿に當る計東は、義父が「破産を惜しまずして復社をはじめた」とまで称しており、おそらくかなりの援助を行つていたものと想像される。彼の経済的な基礎については具体的に明らかにすることは出来ないが、彼の子南齡は朱彝尊の娘と結婚しており、^⑬朱氏は東閣大学士にまでなつた朱国楨の一族に當る。このような婚姻関係からしてやはりこの地方の名族であつたと推定される。

また復社の第三回大会のときには復社の同人であつた呉

県の許元愷が千余金を醸出している。許元愷の父は大学生で終つてゐるが、父の歿後、饑饉に際して母は二百石を出して数百家を賑恤したことなどから、やはり相当の地主であつたらう。のち復社を誹謗した反対派が五狗と嘲けつた^⑩。黄某、曹某、陳某、趙某、陶某はこうした復社の支持者たちから醸金を募つてまわり、その財政活動を支えていたものである。しかし復社は必ずしもこのような醸金にだけよつて活動していたのではなかつた。第一回尹山大会のときに集つた文章二千五百余首は南京の書坊によつて出版されたが、このなから多数の合格者を輩出したため、とぶような売行をしめし、書坊はこれによつて莫大な富を得たといわれる。このような評選を通じて得た利益が、復社のひとつの経済基礎になつたことはほぼ疑いない。

復社に加わつたのは、いうまでもなく八股文の評選を希望する生員層であるが、彼等二千乃至三千の出身階層は非常に雑多であつた。反対派は僧侶、道士、俳優、医者、易者までその傘下に擁していると非難しているが、その主流はやはり科挙受験を希望する地主層であらう。そのなかにはかなり窮迫した状況のもとにおかれた地主層も多数

参加していたことは大久保氏が個々に検出された出身状況によつても知ることが出来る。また八股文の評選を希望する以上、なかには永年科挙に受験しながら合格しない万生員も多くふくんできたことは当然で、こうした人々がやはり一種の不平等分子として、現状否定的な雰囲気をつくつていたことも想像される。

さてこのように復社は全国的な生員の組織として成立しながら、やはりその主導権をにぎつていたのは、旧廬社を中心とする蘇州一帯の人々であつた。彼等はこの地方の官紳地主の家庭に出身するものが多く且つそれらによつて財政的に支持されていたことも事実である。このような地主のなかには、張氏や陳氏のように「僮僕」を使役してのやや寄生化した地主経営を行うものもあつたようであるが、その経営の具体的な内容がどのようなものであつたか、とくに彼等が、この地域における急速な商工業発展にどのようななかたちで関与していつたかについては、残念ながらほとんどその史料がない。将来、この地域における地主制一般が解明されていくなかで、あらためて論じられなければならない問題であらう。

さて当時この地方にあつては農民の階級分解が急速にすすみ、全人口の90%が零細な土地を耕作する小作農民であつたことは周知の事実であるが、万曆末以降さまざまな形で政治的収奪の強化は当然地主から農民に転嫁されることによつて、こうした小作農民を一層窮乏化せしめたであろう。しかもこの地方の商品経済の急速な展開は、この窮乏化を一層促進する。太倉の呉偉業の「木棉吟」は、隆慶・万曆時代にはしきりにやつて来た商人も訪れず、棉花は何年も不作つづき、しかも値段は土の如く安く、租を収めるにも足りないこの貧しい農民の悲しみをうたつてゐるし、^②のちにのべる復社の周之夔排斥運動も、あきらかにこうした棉作地帯における農民の米価騰貴に対する抵抗力の弱さを問題にしておこつたのである。^③

このようにこの先進地帯において尖鋭化した矛盾はまさに爆発寸前にあつた。明末・清初、この地域を舞台として多くの奴變や、抗租運動が発展しているが、なかでも太倉を中心に崇禎十七年におこつたいわゆる乙酉の乱は有名であつて復社の運動の背後にこうした立上ろうとする農民のあつたことは疑い得ない事実である。

たしかに復社の同人たちの多くは、「紀綱の僕」や、「僮僕」を役使して地主経営を行い得るような地主層であつたが、しかし彼らのなかには、張薄のように個人的に「紀綱の僕」にはげしい憎しみをもつものもあつた。しかも彼らは書坊に寄生し評選によつて生活することも可能だつたわけで、地主に出身しながらも相対的に地主経済から自立し得る側面をももつてゐる。

あたかも農民反乱が北中国にひろがりつつあるとき、このように地主のなかでも比較的開明的たり得る層が、明王朝の政治的収奪に反対するとともに、「紀綱の僕」の横暴に象徴される地主の権力支配をも緩和せしめて、当面の政治的危機をのりきつていこうとしたのが、この運動であつたということが出来ようか。しかし、彼らの運動のもつた客観的な意味については、次号にのべる復社の政治運動なり、政治綱領なりの分析を通じてさらに考察されなければならぬ。

① 『復社紀略』巻四

② 『復社紀略』の本文は虎邱大会は癸酉春（六年）と明確に記されているが、前述の総綱はこれを五年にしている。復社年表

を著わした程穆衡も五年説をとつているので、ここでは一応程氏にしたがっておくが、決定的な史料はない。（『梅村編年詩箋註』巻一・哭志衍註参照）

- ③ ②は道光刊本。③は貴池先哲遺書所収。なおこの三種の本については朱希祖「明季史料題跋」（一九六一）にくわしい。
- ④ 拙稿「東林派のその政治思想」（『東方学報』二十八）
- ⑤ 陳去病「五石脂」『国粹学報』二十一期
- ⑥ 本稿（下）参照。
- ⑦ 『復社紀略』巻二
- ⑧ 佐伯有一氏「明末董氏の変——所謂「奴変」の性格に関連して——」（『東洋史研究』十六ノ一）
- ⑨ 『復社紀略』巻二
- ⑩ 同 巻四
- ⑪ 同 巻一及び『南疆逸史』巻二
- ⑫ 陳子龍年譜（『陳忠裕公全集』所収）

⑬ 四十頁参照

⑭ 『静志居詩話』巻二十一 呉翮の条

⑮ 同 右

⑯ 吳偉業「許節母翁太孺人墓誌銘」（『梅村家藏稿』巻四八所収）

⑰ 『復社紀略』巻二

⑱ 同 巻一

⑲ 同 巻四

⑳ 大久保英子氏前掲論文

㉑ 『梅村家藏稿』巻十所収

㉒ 次章参照

㉓ 田中正俊氏前掲論文及び謝国楨氏前掲書附録二「明季奴変考」

参照

補1 横田輝俊氏「幾社の成立について」（『支那学研究』14）

補2 恐らく社集の名。

補3 『復社紀略』巻一

The Society of *Wo-Jên* 倭人 in the Second and Third Centuries

by
Kenji Maki

Though *Wei-chih-wo-Jên-ch'uan* 魏志倭人伝 is a chapter at the end of *Tung-i-ch'uan* 東夷伝 in *Wei-chih* 魏志, it has been treated as an independent article and it has been neglected that it was an important referential source in relation to the state and society of *Wo-Jên* 倭人, and that it was included in a volume of *Wu-wan-hsien-pi-tung-i-ch'uan* 烏丸鮮卑東夷伝.

The writer has already decided that the situation of *Yamadai-koku* 邪馬台国 was in the northern *Kyûshû* 九州 by the new reading method of the traveling articles; moreover about the Second and third centuries' society in *Wo-Jên-ch'uan* 倭人伝 a new theory shall be offered from some source materials.

This article, at first, treats the nature of *Wo-Jên-ch'uan* as a material of *Wo-Jên's* society; and then it discusses the existence of *Wo-Jên's* society in the late tribe period judging from the steps of historical development; further more it explained *Kokuyû* 国邑, *Yûraku* 邑落, *Taijin* 大人, *Geko* 下戸, *Sôzoku* 宗族, *Monko* 門戸, and *Ie* 家, but also status in common people, the nature of *Nuhi* 奴婢 and *Seikô* 生口, and the position of women.

A Study of Associations at the End of *Ming* 明 dynasty

—especially of *Fu-shê* 復社—

by
Kazuko Ono

At the end of the *Ming* 明 dynasty, after the destruction of the *Tung-lin* 東林 party by suppression, was established *Fu-shê* 復社 based on the *Shêng-yüan* 生員 level, *Fu-shêh* played an important

part in order to make reactionism one of the current ideas of the times, having a nationwide organization as an eliminating organization of *Pa-Ku-Wên* 八股文 with a slogan of revival of ancient studies, and had a great political influence equal to the *Nei-Kuan* 內官 faction, supported by its nationwide organization; at the end of *Ch'ung-chên* 崇禎 it temporarily realized its political idea with some compromise by forming the cabinet of *Tung-lin* faction.

This means a political movement of comparatively civilized landlords in the advanced area of *Chiang-nan* 江南 standing against the rotten administration of the *Nei-Kuan* 內官 faction to pass through the then crisis a national crisis of inside development of agrarian disturbance and of outside invasion in *Manchuria* 滿洲. In the history of politics and ideas in the late *Ming* and early *Ch'ing* 清 *Fu-shê* has a very great importance.

Oldcastle's Rebellion and its Significance

by

Michikazu Matsuura

Oldcastle is well-known as Falstaff in Shakespeare's "Henry IV." To begin with, tracing his stormy career, we tried to explain why he raised the rebellion. Though the so-called "Oldcastle's Rebellion" has in it many complicated phases, such as Oldcastle's personal fascinations, the participation in the rebellion of the outsiders, the utopian concept of "God's commonwealth" to be realized, and the organization for delivering the notice of the project, it was still fundamentally a kind of a heretical movement. And yet it could not help carrying some political and riotous aspects with it, involving knights, gentries, merchants and artisans (especially weavers), who wanted to do away with the status quo, themselves being spurred by the Hussiten movement in Bohemia and by the influence of anti-clericalism as was seen in the confiscation of the alien priories.

On account of these aspects of the rebellion, the Lollard move-